

平成 23 年 9 月 17 日 (土)

15:00～16:20

富山県民会館 302 号室

第 3 回 2 限目 「韓国の子育て教育熱」

講師 富山国際大学子ども育成学部

教授 水田 聖一 氏

私はもともとアメリカの教育を専門にしているが、アメリカがしていることを、そのまま日本に持ってきていいとは思っていない。アメリカの研究はするけれども、それを日本でどう生かせるのかをよく考えなくてはならないというのが私の立場である。



韓国では、2007 年に幼稚園の教育課程が大きく定まった。その際に日本保育学会と韓国の幼稚園教育学会・保育学会が共同で国際シンポジウムを開いたことがきっかけで、韓国の教育についても興味を持ち始めたのだが、韓国はアメリカのことをよく研究しているにもかかわらず、アメリカに流されていない。日本はそこを学ばなくてはいけないのではないかということ、今日はお話しさせていただきたい。

政治の世界では、TPP（環太平洋パートナーシップ）ということがよくいわれている。アメリカと仲良くしようという話だろう。そういう環太平洋が中心の時代に、環日本海と言っているのかという気もするが、実は環日本海を大事にするのはいいことなのだというのが、今日の話の結論である。

1. 韓国を取り巻く文化環境

韓国は、伝統的に儒教的価値観の影響が強く、男女の差、長幼の序の原則が根強い国で

あった。しかし、現在、長幼の序は残っているものの、男女の差についての考え方は大きく変わりつつある。古来、女性の仕事は家のことのみに限られていて、忍耐と服従の精神を持って家事に専念することが美德とされてきた。ところが 19 世紀以降、宣教師が設立した学校によって啓蒙と教育が行われると、儒教的女性観は急速に廃れていった。現在は男女の平等が憲法で保障され、2003 年に盧武鉉大統領になって以降は、「両性平等社会」という理念を掲げている。女性差別の代表格であった戸主制度も廃止された。

それに伴い、女性が高等教育を受ける機会が非常に高まっている。2006 年の報告では、大学に進学する男子は 82.7%、女子も 80.4%で、2008 年には 83.8%と、世界的に見ても非常に高い水準になっている。ただ、元駐韓アメリカ商工会議所会長のジョフリー・ジョーンズは『私は韓国が怖い』という本の中で、「韓国は男たちにとっては住み心地のよいところかもしれないが、女性には息苦しく、融通の利かない国だ。女性は、仕事を終えた後、家のことも全部しなくてはならないので大変だ」と言っている。最近はそのあたりの事情も変わってきてはいるが、それが一般的な話である。

2. 韓国の幼児教育施設

韓国の幼児教育施設には、日本と同じように幼稚園と保育所がある。保育施設（オリニジブ＝「子どもの家」）は女性部の所管で、幼稚園は教育人的資源部が所管している。ほかにも「ノリバン＝（遊ぶ部屋）」と呼ばれる民間のデイケアセンターのようなところや、「ハグォン」と呼ばれる幼児のための塾がある。

幼児教育の専門家たちは、幼児教育の重要性についての認識が社会全般に広まっておらず、幼児教育の本質が認識されていないという見解を持っている。幼児の就園率を高めるための 1980 年代の量的増進優先政策の樹立および施行は、幼児教育機関の質的水準を低める結果を招来し、幼児教育の本質についての認識不足現象を引き起こした。幼稚園や保育所がたくさんできたのはよかったのだが、その質が低かったということである。幼児期から英語や美術などを教えてよいのだろうか、幼児教育者は思っている。

韓国は日本のように中央集権ではないので、地域ごとに割とばらばらなことをしているところがある。しかし、2007 年ごろに国全体の統一した考え方、標準を作ろうという動きが出てきて、その中で注目されたのが三星（サムスン）が 1988 年に同企業の利益を社会に還元する目的で設立した三星福祉財団の保育事業である。

三星福祉財団には、高齢者福祉部門と保育部門の二つがあり、保育事業は四つの目標を

掲げている。(1) 保育施設を造り、母親の働くことと子どもに質のよい保育を保障すること。(2) 家庭福祉の増進、特に低所得者層の地域で親の生活相談や改善に寄与するとともに、子どもに質のよい保育を保障すること。(3) 高い保育の質を支える保育教師に、国際学術大会を含む現任研修を行うこと。(4) 大学に所属する研究者と共同研究し、保育プログラムや教材・教具の開発を推進することが掲げられており、非常に安くて質のよい保育事業を展開している。

中でも注目したいのは、社会福祉士が配置されていることである。社会福祉士というと、日本では高齢者の介護福祉にかかわる方が多いが、三星は社会福祉士を保育所に配置し、さまざまな相談に乗ったり、子どもへの支援、親への支援を行っている。日本では最近、モンスターペアレントという言葉がはやっているように、親の身勝手に子どもを教育しようという考え方が多いこともあって、社会福祉士であるスクール・ソーシャルワーカーが小学校や中学校に入って親や子どもの相談に乗っているが、韓国で保育施設に社会福祉士が入っているというのは、非常に先進的なことだと思う。

3. 韓国の教育熱

韓国には、「教育熱」「教育熱風」という言葉がある。学齢期はもちろん、就学前の早期教育にも非常に熱心である。韓国では近年、幼児教育の風潮として、「学習紙症候群」が生じているという。いわゆるプリントを 4～5 歳の子どもにさせるのだが、無理やり勉強を押しつけることで、精神的に悪影響を及ぼしているといわれている。

韓国からアメリカに渡ったコウ・チョン・ヘソンは、韓国の教育熱について「韓国から世界的なゴルフ選手が誕生すると、自分の子どももゴルフ選手にしようとクラブを握らせたり、映画俳優がよさそうだとみると、すぐ演劇学校に通わせたりする。そういう親は、ただ富と栄光という結果にばかり幻惑されているのではないか。子どもの幸せを思っていると口では言うが、本当は親の幸せを考えているのではないか。勉強しなさいと言うけれども、本当に子どものためになっているのだろうか」と語っている。そうはいうものの、親としてみれば、ほかのみんながやっていたら自分の子にもやらせたいという気持ちが起こってくるのは当然だろう。

平成 19 年、韓国ソウルにある国立民族博物館に行ったときに、複数の幼稚園から幼稚園児が見学に来ていた。私服で来ている子ども、ジャージのような制服で来ている子ども、チマチョゴリやパジチョゴリの制服で来ている子どもなど、服装はさまざまだったが、私

が不思議に思ったのは幼稚園児が国立民族博物館に来ていたことである。先生が一つ一つ説明しているのに、幼稚園児は棒に登ったり、立ち入り禁止のところに入っていったりしている。私はそれを見て、小学校、中学校まで待てない、幼稚園から勉強させておかないと手遅れになるのではないかという韓国の教育熱、超早期教育の一端を見た思いがした。



4. 早期教育に対する警鐘

一方で、そうした風潮に警鐘を鳴らす人たちもいる。環園大学校の鄭美羅教授は、「韓国社会はまれに見る少子化社会になり、少なく生んで上手に育てるという考え方が広がった。『上手に育てる』が言葉どおりに行われればいいのだが、賢く育てたい、自分の子どもだけは立派に育てたいという親の熱望が、英語学習、中国語学習や過度の商業主義によるさまざまな早期教育につながっている」と指摘している。

また、延世大学校医科大学小児精神科の教授で、新村（シンチョン）セブランズ病院小児精神科の医師でもある申宜真先生は、2000年に『賢い親は子どもをゆっくり育てる』という本を出版して、子どもをどれだけ愛しているかではなく、どのように愛しているかが

重要だと説いている。

近年、韓国の多くの親は、子どもの幸福は即親の幸福であり、子どもが成長したときの社会的地位が高ければ、親の人生は成功だと考えている。韓国人の特性の一つである「せっかち」「性急」が子どもの養育においても表れていて、小児精神科医を訪れる親子に「子どもが本当に必要なものを見つけてあげよう」と言っても、「そんなのんびりしたことはしてられない。ほかの子どもたちに遅れては駄目」という強迫観念がとても強く、受け入れられないとおっしゃっている。

また、ゆっくり育てることが大事だということを強調して、one step behind と one step ahead という子育て戦略を提唱されている。one step behind とは、一呼吸置いてから対応する方法で、子どものなすがままを見守り、何かに好奇心を示したときに親がそっと後押しすればよいということであり、one step ahead とは、子どもの気持ちを先回りして理解・共感することが大事だということである。例えば、小さい子どもは、ご飯が食べたいのに「ご飯が食べたい」とうまく言えないことがある。そういうときに、親が「ご飯が食べたいの」と言ってあげることが大事だとおっしゃっている。

この考え方はもっともだと思う。それで私が思い出したのは、柳田國男さんの言う「見やらい（こやらい）」である。「やらい」とは追いたてるという意味で、前から引っ張るのではなく、後ろから「さあ、行きなさいよ」とそっと背中を押して独り立ちさせてやる教育が大事なのではないか。前から引っ張っていても、いつまでたっても自分で考えて行動することができない。子どもを前に立たせてやっていこうという考え方で、申先生のおっしゃる one step behind とよく似ているし、アメリカの児童心理学者デイビッド・エルカインドらピアジェ派が提唱している「発達段階に即した教育」の考え方とも共通している。

申先生は、賢い親が実践していることとして、以下の 6 点を勧めている。(1) 子どもが喜ぶ遊びを選ぶ（親が「よかれ」と思っても、押しつけると副作用がある）。(2) 他の子と比べて怒ったりしない（子どもの発達は一人一人違う）。(3) 発達を見守り、過剰な心配をしない。(4) 焦らず、急がず、絶えず励ます（徳川家康公遺訓「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず」）。(5) 子どもの盾になってやる（「子どもは宝」）。(6) 無条件の愛情と信頼を示す。申先生がこうおっしゃるのは、早期教育の一部の成功例は報道されるけれども、他の大部分の人たちはうまくいっていないことを知っているからだ。

そして、「ゆっくり子育て七つの提案」もしておられる。①親としての自分を振り返ってみよう（親子の心は結び付いているか。子どもが送るサインに気付き、子どもの目を見て

話をしているか)。②感情のコントロールを学ぼう。③「なぜ？」をたくさん言わせよう（しつけの代わりに協議と交渉をしよう。子どもが納得できるレベルまで降りて話そう）。④言いたいことは「ユーモア」にくるんで伝えよう。⑤分かってくれないときは、親が我慢しよう（子どもに我慢させたことの副作用は、後々出てくる）。⑥教えたことは、親がやってみせよう（やってみせ、やらせてみて、褒めることが大事である）。⑦子どもはラグビーボールのようなものだと悟ろう（子どもには子どもなりの理由があることを分かってあげよう）。

5. 他山の石に

近くて遠いといわれる韓国の文化や幼児教育を調査した後の感想は、日本とよく似ているということだった。ともに儒教的文化圏という歴史的背景を持ち、自然を大事にする考え方をもちながら、急速に西洋化し、伝統と最新技術とのギャップに戸惑いを持っている。韓国でいわれていること、申宜真先生が言われているようなことは、既にアメリカなどでも指摘されている。しかし、アメリカでいわれていることをどう受け入れ、消化するかという点に関しては、日本が学ぶべきところは多いと感じた。日本では、伝統的なものはすべて古いもの、捨てるべきものだとする傾向が強いが、韓国は、伝統を大事にしながら、新しいものをうまく取り入れていこうという姿勢を持っている。コウ・チョン・ヘソンさんは、「東洋の美しい風習をアメリカ国内に知らせようという意味も必要だ」とおっしゃっている。こういう考え方も必要だと思う。

礼儀作法に関しても、日本と韓国はよく似た面があるが、申先生は「韓国のお母さんが強迫観念を抱くほどしつけに厳しくなるのは、国民性といえるかもしれない。大切な子どもだからこそ、厳しく育てなければならないと思っている。韓国ではそういう考え方が美德だといわれ、礼節が非常に重視されるが、礼儀を教えるという名目で、子どもの自発的な発達を抑圧している場合が多いのではないか。親たちは、当然の教育をしたと思っているが、子どもにとっては過酷な状況なのではないか」。そして、「日本にも似たような風潮がある。他人に迷惑をかけないようにという考え方は、日本人の奥ゆかしい国民性を象徴しているが、子育てでは禁句である。乳幼児期に必要以上の制裁や圧迫を与えていると、自我を自滅させかねない」ともおっしゃっている。日本を例に挙げて、日本のようなしつけをしては駄目だと言っているのである。

子どもたちは、いろいろなことを体験したいものだ。紙があれば、ビリビリ破ってみて

実験する。だから、大事な書類はしまい、昨日の新聞を置いておいて、思う存分破らせてあげればよい。新しいソファで飛び跳ねられることに腹が立つなら、壊れてもいいソファで飛び跳ねさせればよいのだ。最近、富山のある先生が「日本の子どもは自己肯定感が低い」とおっしゃっているが、その理由はしつけにあるのではないか。小さいころから 20 年近く「お父さんやお母さんの言うとおりにしなさい」と言われて育ってきた子どもが、いきなり「あなたの言うとおりに、自分で考えてやっごらん」と言われても、できるわけがない。自分の考えでやっていいのだという考え方も出てこない。幼児期からの子育てにその原因があるのではないかと申先生はおっしゃっているのだが、私も全く同感だ。

幼児期の教育には副作用があるが、すぐには出てこないで分からない。アメリカで、ある研究者が双子を使った実験をしたことがある。ジョニー君には三輪車の乗り方や木登りの仕方など、いろいろなことを教えた。そうすると、どんどんできるようになった。もう一人のジミー君には何も教えなかったが、ジョニー君がやっているのを見て、できるようになっていった。子どもの教育には遺伝も環境も関係ないという結論が出たのだが、十数年後、別の人がこの双子を追調査したところ、いろいろなことを教えられたジョニー君は、今で言う指示待ち人間になっていた。一方のジミー君は自信満々で、自分のしたいことを積極的にどんどんやっていく人間になっていた。大人が早期に教育してしまうと、自己肯定感を持てる人間に育たないのではないかということをおっしゃられる話だと思ふ。

早ければいいという考え方は日本でも韓国でも変わりがなく、非常に中心的な考え方だが、小児精神科医からはその考え方には問題があるという警告が出ている。そういう考え方はやめようという動きも韓国では出てきていて、その韓国では、先ほど言ったように日本の例がしょっちゅう取り上げられて、「日本のようになったら困るぞ」と言っている。私たちはこのことを肝に銘じ、環日本海に目を向けつつ、日本にふさわしい社会的子育て環境を作り上げていかなければならない。